

Love Case①



橘右近

SCENE 1 : 役者はそろった【晟】

公演が始まる10分前。

最後のトイレに行く者、パンフレットを手にこれから始まることに胸を躍らせる者、主催側の最後のチェックなど、このコンサートホールは様々な音で賑わっていた。

200席ほど入りそうな広さの客席部分に、4人分の料理が並べられたテーブルが8つほどある。

榎倉晟(かしくら せい)は用意された椅子の背にもたれながら、差出人不明で送られてきた招待状を確認した。

『親愛なる榎倉晟様

今までの感謝を込めて、これからあなたにお似合いのプレゼントを贈ります。まずはこのチケットから。特別席をご用意しました。

どうぞ、私の気持ちをお受け取り下さい。喜んでもらえることを願って——あなたの友人より』

そして、チケットと共に演目6番に丸印がつけられたパンフレットが同封されていた。

ご丁寧にも。

晟は軽く息を吐きながら招待状を放り、代わりにパンフレットを手を取った。

6番目に演奏されるクラシック音楽は、今は亡き友の墨木明日香(すみき あすか)が好んで弾いていたものだった——

彼女が目の前で殺されてからおよそ一年。

未だ記憶が鮮明に残る中、なぜこんな招待状が届いたのか。誰が送って来たのか。上等だ、のっかってやるよ。

晟は怒りにも似た眼差しを招待状に向けた。

開演の合図と共に、徐々に暗くなる視界。

さあ、お手並み拝見といこうか。

SCENE 2 : アクシデント【智孝】

「D1だ。気をつけろよ」

「了解」

舞台の袖に裏方として様子を見ていた伊藤智孝（いとう ともたか）は、簡単な英数字で指示を出した。

多種芸術講演会と称したイベントで、中国の舞を踊るような衣装を身につけた玖堂有羽（くどう ゆば）と山緒里紗（やまお りさ）は、扇子を手に、どこか艶やかな舞を披露しながらも、見えないように装着されたマイクでそう返事をする。

二人が舞台の両端に分かれた時、それは起こった。キラリと客席から光が放たれた瞬間に、空気を裂くような速さでフォークが投げられたのだ。

何が起きたのか理解するまでの間に、もう一つ今度は有羽に向かってナイフが飛んでくる。ざわつき始めた会場内だが、智孝の指示により、里紗は演出の一部のように踊りながら『D1』と呼ばれたテーブルの前に立ち、バレーボールのレシーブをするかのように両手を組んだ。

刹那に宙を舞う踊り子。綺麗に弧を描いて着地すると、有羽は持っていた大きめの扇子を広げ、テーブルにあったフォークを『D1』の喉元に突き立てた。

「おじさま、私達を味見しようとしたって無理よ」

有羽と『おじさま』と呼ばれた男のやりとりは、照明の関係から扇子に映る影絵のようだった。イヤホンを装着している智孝や里紗、男の周辺にいる人物以外にその会話は聞こえていないだろう。

有羽の気迫におされた男は、降参の意を表すように両手を肩の位置まで上げる。

「は、はは、冗談だ」

「私ね、今すっごくお腹すいてるの。またこんなことしたら、これでおじさまを食べちゃうよ？」

クッと少しだけフォークを突き上げると、男は顔を引きつらせながら小さく呻いた。

重なり合う2つの影の間で、ほのかに光が発せられる。

あいつが今回の任務のターゲットか？

智孝は訝しげながらも、今し方自分たちの仕事の1つを終わらせた有羽の様子を見つめた。

「ふふ、冗談よ」

パンと音を立てて扇子をたたむ有羽。反対側のテーブルで扇子の代わりに天女を思わせるような布で観客たちにパフォーマンスを広げていた里紗は、それを合図に舞台へと戻る。

演奏の終了と共に最終の立ち位置でポーズを決める二人は、お辞儀をした後に手を振りながら舞台の袖を後にした。

「やりすぎだ」

「えへへ、ごめんなさーい」

どこか呆れた様子の智孝に、有羽は悪びれる素振りも見せずに軽く謝った。

それよりもと、『D1』が今回のターゲットであったのかを尋ねる智孝に、有羽は少し考える仕草をとる。

「ほんの少しだけ魄（はく）の気配はしたけど、違うと思う。お酒の勢いを借りてって感じだった。それより気になるのは会場の雰囲気かな。建物全体がなんか異様だよな」

それは自分も思っていたことだった。会場内というよりは、建物自体がまるで生物であるかのように重苦しい空気を放っていた。

少し、調べてみるか。

他にも会場内では仲間が潜入していることから、智孝は公演終了まで建物内を見て回ろうと思ひ、それを二人に告げる。

「じゃあ、着替え終わったら連絡するね！兄ちゃんが調べられない所はお任せを」

有羽がおどけてそんなことを口走る中、演目6番が始まった――

SCENE 3 : 恐怖の始まり【有羽】

「くうー！ー仕事終わった後のスイーツはうまい！」

ストレス解消に酒を飲むサラリーマンが言いそうなことを口にしながら、有羽は目の前にあるチョコレート味のシフォンケーキを頬張った。

「結局、何もなかったね」

里紗の言葉に、有羽はもぐもぐとケーキを堪能しつつ自分の考えを言おうとした時だった。

「あなたはいいわよね、仕事がなくなる心配がなくて」

と、隣に座っている女性の声が聞こえた。

ケーキと共に里紗に告げようとしていた言葉も呑み込み、女性に視線を向ける。二人の時間を楽しんでいるカップルのようだが、彼女の発言で男性の表情はこわばったままだ。

その後に「私の会社なんて、今月3人も辞めさせられたわ」と続き、どうやら自分がリストラされるのではないかと、という悩みを打ち明けているようだった。

有羽の視線に気付いた里紗も、何も言わずにカップルの会話を盗み聞く。

「公務員なら、その点安泰なものね」

「えー、でもそれってさ、お医者さんに「あなたは足場から落ちる心配しなくていいわね」って言ってるようなものじゃない？」

「……………は？何あなた」

突然、横やりを入れられた彼女は不機嫌そうな顔で聞き返す。しかし有羽はというと、一向に気にしない様子で里紗に話しかけた。

「もしかして、心の声が漏れてた？」

「出てた出てた。かなりの音量だったわよ」

「いやーついペロッと。何か違うなーと思って。んー、しかもさ、その会社って自分で選んだんだから、そのことでお兄さんを責めるのも間違ってると思っちゃうんだよね」

「だから、さっきからダダ漏れしてるってば。しかも声でかい」

先程から自分への返答がこないことにも、その内容にも腹を立てた女性は「ちょっと！」と声を荒げて有羽を呼び掛ける。

「あ、お姉さん。ここに何かついてるよ」

またも暖簾に腕押しの状態を続け、有羽は自分の左肩を人差し指でとんとんと叩いて見せた。素直に有羽の示した肩に視線を向けると、その隙を待っていた有羽は無防備となった反対側の首筋に触れる。

首なんて、人に触れられたら何らかのリアクションをしそうなものだが、彼女はぴくりとも動かなかった。有羽は眼が閉じている彼女を見つめたまま、彼氏に言葉を告げる。

「お姉さん、不安なのかもね。仕事がなくなった後、自分はどうなってるのか。お兄さんとはどうなってるのか」

このお姉さんも違うみたい。だけど、おかしいな。こんなに魄が一度に出てくるものなの？

そんな疑問を晴らすように、有羽は小さく「よし」と呟き、パチンと指を鳴らした。

それを合図に目を開く彼女は、一時(いっとき)の記憶を失っていたように「何を話していたんだっけ？」と彼に向かって質問した。

状況を理解できない彼に、里紗は一言だけ「一種の催眠術だと思って下さい」と怪しい言葉を残し、去ろうとする。そこへ

ジリリリリリリリリリ

と、火災報知器が鳴り響いた。

一気に店内がざわめき始め、店員の指示にそって一旦外へと避難する。

代金をレジの上に置き、ひとまず智孝と連絡をとろうと試みるが、なぜかつながらなかった。スマートフォンといった類の電子機器も使えず、有羽は里紗の顔を見るが頭を横に振るだけだった。

そして後方で人々の叫ぶ声と、ガシャンと何かが割れた音がする。

一体、何が起きているの？

音がしたエントランスに着くと、辺りは騒然としていた。当たり前だ。電気が通っているはずの自動ドアは、何故か作動しなかったのだから。

頑丈に作られているそのガラスは、植え込みを投げつけようが割れることもヒビが入ることもなかった。

誰かは非常口を捜そうと、誰かはそこに留まって正常に作動する時を待ち、誰かは何か方法はないかと議論を始めた。

ものの10分足らずで一変した状況に、有羽は恐怖を覚える。

そこに更なる恐怖。

男性とも女性とも判断ができない合成音のような声が、先程はどうにもつながらなかったイヤホンから届く。

「字守(あざながみ)たちよ、君たちは一体何人の犠牲者を出すのか楽しみだ」

まるで建物が自分の意志で動いているようだった。

SCENE 4 : 出会い【晟】

非常ベルの音が鳴り響き、続いて何かがぶつかる音や物が壊れるような聞き慣れない衝突音がすれば、会場内はいよいよパニック状態になった。正面玄関へ向かおうと避難する人々が互いを押し合い、もつれるようにして会場を後にする。突然のことに周りは騒然としていて、スタッフもバタバタととりあえず動いているようだった。

演目6番では何も起こらず拍子抜けしていたが、これが目的だったのだろうか？しかし未だに自分に対するアクションはない。

晟はスタッフに誘導されるギリギリまで会場内に留まり様子を見ていたが、それらしきものは何も感じられなかった。

5番目に起きたアクシデントが、本来のプレゼントだったのだろうか？そもそも、この丸印には意味がない？そんなことを考えながらエントランスホールに出ると、マスクをした一人の女性が狂気にも似た奇声を発し暴れている人々を倒していた。

あれは、扇子の子？

間違いない。もう一人、マスクを装着した女性が急におとなしくなった人達を静かに寝かせている。扇子の子が宇守で、もう一人の子は補佐なのだろう。

それならばと人波をかき分け、魄を鎮静化している中心人物へと走った。

囲まれている彼女の背後に立ち声をかける。

「こいつら皆、魄にとりつかれたのか？」

小さく「え？」と聞き返すものの、自分と同じ境遇であることを察した有羽は、肯定の言葉を返した。

「あの音声の後、ホール全体の空気が重くなったと思ったら、こんな感じに」

あの音声？一体何のことだろうか？そのことを尋ねても、うじゃうじゃと湧き出てくる魄に邪魔をされ会話を続けることができなかった。

キリがね一な。

晟はベルトに差(さ)してあった刀の柄(つか)を手に、数秒意識を集中させる。青白い炎のような塊が刀身を現すと、有羽たちに向かって伏せるよう言葉を投げた。

一瞬の出来事だった。

晟がその炎の刀を回転しながら横に振るうと同時に、かまいたちのような風が魄たちめがけて駆け抜けた。

突風にあおられたと思った次の瞬間には、ぱたぱたと魄たちが倒れていく。

「すごいね。兄ちゃん以外では初めて見たかも」

起きている者が自分たちしかいないことに安堵した有羽は、のんきにもそんなことを言った。炎の刀身が消えた柄を再びベルトに付けながら晟もそれに応える。

「兄ちゃん？」

「あ、えっと、伊藤智孝……先生？」

「え、先生と兄弟なの？」

「ううん。私が小さい時から一緒にいるから勝手にそう呼んでる」

この少しの会話でもころころと表情が変わる有羽に晟は親しみを抱きながらも、先程聞けなかった質問をした。

「あの音声って何？」

「あれ？あなた字守だよな？」

「今日はプライベートで来た」

「へー……なんか、すごいね」

依頼を受けている字守なら知ってて当然なことを聞いてきた晟を不思議に思いながらも、その理由に有羽は何だか感嘆した。自分にはプライベートでよほどのファンでない限り、演奏会といった観賞を嗜むことをしないからだ。

「招待状っていうか、挑戦状みたいなものが来たからね。受けてみた」

眠っている人波を掻き分け、自分の元に来た里紗と視線で会話をした有羽は、小さく頷いた後、躊躇いがちに口を開いた。

「もしかして、榎倉晟……くん？」

驚いた。確か、初めて会うはずなのに。名前が彼女の口から出てきたことに、やはりこのイベント自体が自分のために開かれたものだと思い、晟は心の中でため息をついた。

「そうだよ。どこかで会った？」

「あ！そっか、ごめん。えーとね、どこから話す？」

先程からちょっとずれた回答をしてくる有羽に、晟は吹き出す。依頼で来ていることはわかっているの、お互いの状況を確認しようととりあえずこの場から離れることにした。

連絡のとれなくなった智孝がいるかもしれないということで、共に控室へと向かう。

晟は差出人不明の招待状が送られてきたことと、まだ現状では特定できないことを伝え、有羽は非常ベルの後に連絡がとれなくなったことと、あの音声についてを話した。

「で、その音声の後に犠牲者を少なくするためのヒントがあったんだけど、それが『榎倉晟に会え』だったの。でも」

ちらりと有羽は晟を見つめ、言葉を続ける。

「私たちは、榎倉くん？晟くん？を知らなかったし、あの状況だったからどうしようかと思ってた」

「晟でいいよ」

「じゃあお言葉に甘えて。だから晟が来てくれて助かったよ。ありがとう」

「いやそれは……俺もあの踊り見て、字守が関わってるってわかったから。えーと」

「有羽、私達も名前言わなきゃじゃない？」

晟の言わんとしていることに気付いた里紗は、そう助け船を出す。

軽く自己紹介をし、お互いを名前で呼び合うことにした後、晟は考える仕草をとる。字守にそんなことを告げて自分を探させたとしても、自分自身がヒントを把握していないのならこのように行き詰ってしまうはずだ。

依頼人の名前にも心当たりはなく、イベントホールとも縁(ゆかり)はなかった。招待状を難しい顔をしながら見つめる有羽も、ぶつぶつと脳内会話を口に出していた。

「うーん、音楽については私も詳しくないからなあ。彩(あや)ちゃんやミーちゃんがこれに関わっているとしたら、前もって教えてくれるだろうし」

「彩ちゃんとミーちゃん？」

「6番目の演奏で、ピアノとバイオリン弾いてた人達だよ。あの二人も字守で——って、晟」

笑みを浮かべていた顔が一瞬にしてこわばり、自分の腕を引く有羽の視線の先を辿ると、赤いドレスを身につけた女性が廊下に倒れていた

急いで駆け寄り、声をかける。

すると、女性とは思えないような力で晟の腕をつかみ、乱れる呼吸の中言葉を紡いだ。

「あの人に……会わなきゃ」

それだけを告げると、女性は全体重を屍に預け、そのまま目を閉じた。

ズンと腕にのしかかる重さに、一年前の記憶が蘇る。

「お前は結局、明日香を助けることはできない。一人の女すら、守る力もない」

それは呪文のように屍の感覚を麻痺させる。頭の奥で小さな蟲(むし)がうごめいているようだった。払おうとしても払えないその蟲に、屍は顔を歪める。

明日香を殺した男が放った、最後の言葉だった。

SCENE 5 : 飛行機ごっこ【智孝】

まずいな。あれは囮だったのかもしれない。

建物が封鎖される10分前、スタッフ通用口から出たある男性を追って外に出た智孝は、通常ならば立ち寄らない配電装置の前で佇んでいるその男性の様子を探っていた。

魄がとりついてるのは間違いないが、一体何をしているんだ？

智孝が不振に思うのも無理はなく、男性は装置をただ見つめている。暗がりの中、その男性が口元を緩めた時だった。あの音声が耳に届く。

晟？晟がここにいるのか？

ヒントからよく知っている人物の名があげられ、一瞬気が削がれた時だった。装置の前にいた男性は、くるりと振り返り、いつの間にか手にしていた砂を智孝に投げつけた。

幸いにも視界が遮られることはなく、智孝は装備していた銃を抜きとり、男性めがけて放った。

銃弾の代わりに小さい火の玉が勢いよく飛び出し、男性の右足にくらいつた。男性はその衝撃というよりは、体からエネルギーが取り除かれる感覚に意識を閉じていく。

何か音を立てれば即座に意識は戻るものの、放っておいても数分ほどで目が覚めることから、智孝は眠っている男性に歩み寄り身元の確認をする。

そして、そろそろ有羽たちに連絡をとろうとするが、一向につながらないことに一抹の不安がよぎり正面玄関へと急ぐ。

的中しなくてもいい不安が起こっていることは、重く閉ざされているドアと、少々パニック状態になっている人達、鎮静化する有羽たちの姿を見てわかった。

電気関係がアウトならば、その元をたどるか電気の通っていない出入口を探す他ない。

先程眠った男性が傍目には何もしなかったのも、自分を外に出すためだったのかもしれないと思った智孝は、依頼主からもらった地図を見て、先に手動で開く窓から入れないか試してみることにした。確か、1階の男性用トイレの窓の鍵があいていたはずだ。少々手荒な方法だが、物理的に窓を破壊することはできる。

だが予想を裏切り、窓はいとも簡単に智孝を招き入れた。

エントランスホールは既に大勢の人達が横たわっていて、意識も戻りつつあった。有羽と里紗だけで、この短時間この人数を相手にしたとは考えられない。

晟だといったが。智孝は他の字守たちとの合流も考えて、有羽たちが向かったであろう控室へと足早に移動する。

電気もついているのに、この人気（ひとけ）のなさは一体何だろう？本当にここはイベントホールなのかと疑うほどに、通路も店内にも気配がしなかった。

舞台まで辿り着いた頃、ピピッと小さく電子音が鳴った。それまで使えなかった通信が、突然息を吹き返したのである。

「智孝さん、彩です。よかった。これから合流できますか？」

女性の安堵の声が耳に届いた。

「今、舞台袖の近くにいる。そっちは？」

「まだ控室です。こちらでは影クラスの人達も魄にとりつかれたため、負傷者が20名ほどいます。浄化は完了していますが、私がそちらに向かった方がいいですか？」

「いや、俺が行く。そういえば、有羽達とは会えたか？」

「いいえ、まだ。榎倉くんとも会っていません。というか、彼、ここにいるんですか？」

彩の疑問ももっともだと思った。「恐らく」という言葉とエントランスの状況を伝え、智孝は通信を終える。視界の先に見えた男女三人組が、じりじりと何かと間合いをとるように後退していたからだ。

.....赤いドレス？演奏者か？

三人の先には、立ち上がり方を忘れてしまったのか、はたまた力が入らないのか、例えがたい動きをしながら、何度も倒れ、起き上がろうとする女性がいた。

「か.....しくら、せ.....い」

晟の名前を呼ぶと、それまでの動きは嘘のようにスーッと立ちあがった。まるで浮いているかのようだ。

「な、何？」

声を震わせて里紗が言った。そこには、恐怖しか感じられなかった。

女性は蒼白になっている顔に、うっすらと笑みを浮かべているが、首をだらりと横に倒していた。折れていると言っていいくらいに、曲がっていたのだ。

ゆらりと、子供が飛行機の真似をするように、彼女は手を後方に伸ばす——その瞬間だった。

彼女は床を強く蹴って前に飛び出し、壁に激突した。

痛みを感じないのか、ぶつかった衝撃で倒れても、すぐさま勢いよく飛び出してくる。狙いを誰とも定めぬまま、楽しそうに飛行機ごっこを始める彼女に晟たちはうろたえるばかりだった。

「晟！有羽！しっかりしろ！」

智孝はそう声をかけた後、4度目に倒れた彼女に向かって、先程よりも大きく真っ赤に燃える炎の塊を浴びせた。

もう一度魄を浄化する力——朧（おぼろ）を出さなければならないかと思っていたが、5度目の飛行機ごっこは起こらず、その場にいた者の気持ちを代表するように里紗が呟く。

「……終わった？」

傍目にも魄が浄化されていくのがわかったが、確認のために近付こうと智孝が有羽の横を通り過ぎた時だった。

「……っ、ああああああ！！」

悲痛な叫び声をあげ、有羽は膝を折る。膝が床に着くと、必死でバラバラになりそうな体を押しさえるようにしてうずくまった。

「どうした？大丈夫か？」

声が届かなかったのか、答える余裕がないのか、有羽は大きく呼吸を繰り返すだけだった。体から白く淡い光が放っているように見えた後、有羽は静かに意識を閉じた。

幕間：記憶。鬼との出会い【有羽】

有羽はその晩、夢を見た。懐かしく、切なく、大切な人との出会いを。

葉っぱの間からこぼれる光を浴びて、有羽は跳ねるようにして森の中を走っていた。目的地は澄んだ水が風に揺れる湖だ。

小学生が楽しみにしている年に三回の長い休み。

その内の夏の時季(とき)に、それは起こった。

ガサ。

どこからともなく、しかしすぐ近くで物音が立った。

怖い動物だったらどうしよう。そんなことも考えたが、恐る恐る音がした方へと顔を覗かせる。

すると、白く光っている人のような物体がうずくまっていた。

人のような、とつけたのには訳がある。透けるような白い髪がキラキラと太陽の光を反射させ、少しだけ見える肌も同じくらい——いや、それ自体から光を放っているのではないかと思わせるくらいに輝いていたからだ。しかしそれとは逆に、夏には珍しい長袖を重ね着し、なおかつぼろぼろになったマントを肩にかけていた。

「どこか、怪我してるの？」

恐る恐る言葉を投げかける。

声、かけちゃったけど、どうしよう……。

そんなことを思っても後の祭りだが、ぴくりとも動かない彼の返事に不安を覚えた。しばらくしてゆっくりと、そして不思議そうに振り向いた彼を見て、有羽の心臓は大きく飛び跳ねる。

綺麗——思わずうっとり見つめるほどに男性は美しかった。我に返ったのは、彼の顔が怪訝そうに歪んだのを見たからだ。

「あ、あのボク、傷薬持ってるから、怪我したならそれ分けてあげようかな？と思って」

うずくまり方で傷口を湖で洗っていたと判断した有羽は、早口になりながらそう弁解すると、彼はひどく驚いた顔をした。

なんなんだろう？やっぱり変な人だったのかな？でも、腕から血が出てるし……でもでも。

一人で自問自答を繰り返すも、やはり一刻も早く立ち去った方がいいと思い直した有羽は、肩にかけていた鞆から塗り薬の入っている丸いケースを手に取り、差し出した。

彼は、もそっと熊が歩き出すような仕草でこちらに向き直し、じっと塗り薬を見つめる。

「ありがとう」

初めて聞いた言葉が聞きなれた日常語であることに安心した有羽は、笑顔を浮かべて薬を渡す。しかし、彼はというと、やっぱりケースをくるくると回すだけで蓋を開けようとしない。まさか……まさかね。

「使い方、わからないの？」

そのまさかだった。
彼は一瞬で顔を赤くし、薬を有羽の手の中へ押し込んだ。

「これくらい、放っておけばすぐに治るからいい」

まるで新しいおもちゃを与えられた子供が、使い方がわからないために拗ねるような態度だった。

自分よりもずっと大人なのに、変なお兄ちゃん。思わず吹き出した有羽は、薬を持っている手とは反対の手を前に出し言う。

「ボクが塗ってあげる。はい」

最後の言葉とほぼ同時に有羽は彼の手をとる。

すっかり警戒心を解き解いていた有羽は、もう一度血を水で洗い流し、丁寧に薬をつけていった。思ったよりも傷は浅く、薬を塗り終わった頃には、ほぼ塞がっていた。

それから彼は余計に傷が悪化するのでは？と思わせるような薄汚れた布を腕に巻き、処置を終えた。その間もずっと有羽は色々なことを話していた。質問もあれば、この森や自分のことについて、べらべらと止まることなく、だ。

知らない人とすぐに打ち解けるのはやめなさいと、今まで散々言われ続けてきたが、有羽は何より自分の目を信じていた。いい人かそうでないかは見ればわかる。

「お兄ちゃんの名前は？」

だから、ちょっと変わった人でも全然怖くなかった。
ためらいながらも、静かに、低く、その名前が口に出される。

「……牙白(ガラ)」

あの赤いドレスを着た女性から魄が浄化された時に感じた熱と痛みは、牙白と別れた際、私に起きた力の暴発とよく似ていた——